

2024年度 入学試験問題

2月2日 第2回

国語(45分)

注意

1. はじめのチャイムがなるまで問題用紙には手をふれないでください。
2. 問題は2から13ページまでです。
3. 解答用紙には氏名でなく、受験番号を書いてください。
4. 机の上にあるQRコードのシール(どれでも良い)を解答用紙右上の「ここにシールをはってください」のわくの中にはってください。
5. 解答はすべて解答用紙に書いてください。
6. おわりのチャイムがなりはじめたら、書くのをやめて、えんぴつをおいてください。
7. 句読点・記号も字数に数えます。
8. 本文は出題の都合上、一部変更しています。

三輪田学園中学校

一 ― 1〜10のカタカナの部分で漢字に直しなさい。
また、―― 11〜15の読み方をひらがなで書きなさい。
つづき字ではなく、一点一画をていねいに書くこと。

- 1 歴代のオリンピック選手がイチドウに会する。
- 2 議長ぎぎのサイケツサイケツに従う。
- 3 コメダワラコメダワラを積み重ねる。
- 4 事前じきぜんの準備が功をソウして、発表が上手くできた。
- 5 責められてる友人をベンゴする。
- 6 オークションで、有名な絵をニユウサツした。
- 7 彼はキゾクキゾクの名門なもんの生まれだ。
- 8 ロウホウロウホウを聞いて、母は顔をほころばせた。
- 9 ジュモクジュモクの茂しげった山を歩く。
- 10 ムズかしい問題むずかしいに頭かかを抱える。
- 11 偉えいそうに指図さしずするのは良くない。
- 12 美しい所作しよさくを身につける。
- 13 率先すくせんして大変な仕事に取り組む。
- 14 旅芸人として地方を回って興行する。
- 15 大臣として国を司る立場たてまになった。

二次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

中学の社会の時間であった。地元の施設しせつについて調べましようという課題で道の駅がテーマとなった。

道の駅について知っていることや意見を述べましよう、と社会科教師が導入した。

野菜が安い。
おいしいお総菜そうさいが売っている。
ソフトクリームも。

手作りのパウンドケーキやクッキー。
端切れはなきれで作った小物、フクロウとか。
手作りのかっぱう着うぎや腕カパー。

地元において道の駅は気安く出かけていけるアミューズメントでもあったので、生徒の意見はぼんぼんと弾むはじむように出た。教師がそれを板書ばんしょしていく。

意見が一定出尽くした頃ころ、ショートカットの女生徒がすらりと手を挙げた。クラスで一番足の速い子だった。彼女かのことは小学校が一緒で、割と仲のいい友達だった。

「1 国が初めて作った気の利いた箱物です」

急に飛び出した大人びた意見に、ややぼんやりとした社会科教師は目を白黒させていた。箱物という身近でない単語にクラスメイトもきよんとしている。

ぼんやりとした社会科教師は、ううんと困ったように唸うなった。

「……あー、そういう子供らしくない意見じゃなくてだな」

ショートカットの友達も不服そうな顔をしたが、2 彼女も口がひん曲まがった。ぼんやりじゃない、この教師はぼんくらだ。

友達ともだちは明らかに道の駅について核心かくしんを衝つく意見を述べたことが彼女には分かった。というの、3 彼女がそのとき読んでいた小説にもそういうことが書かれていたからだ。観光業くわんくわんぎやうに詳しい熟年のキャラクターが道の駅についてそう語っている場面があった。

自分と同年なのに、小説に書かれていることと同じことを思いつくなんて。何てかっこいいんだろう。

それなのに、子供らしくないなんていうこの世で一番つまらない理由で否定されるなんて。

先生、子供らしくないから取り上げないなんておかしいです。本にだって書かれています。

友達のようにはぐらりと手を挙げて、そう言えたなら。しかし、授業中に教師を真つ向批判するのは、a いささか勇気のいることだった。

手を挙げようか挙げまいか右手をそわそわしているうちに、発表の時間は終わってしまった。

教師は板書した項目について、社会科見学で調べてみましょうと提案した。意見を募ったのは単なる前振りだったらしい。——4 つまんない男。小説の中に出てくるかっこいい大人とは比べ物にならない。

それに比べて、ショートカットの友達の何て輝いていることだろう。

つまらない男のつまらない授業が終わるのを待ちかねて、彼女は友達のところへ飛んでいった。

「ねえ、さっきのすごいじゃん！」

話しかけると友達は席からきよとんと彼女を見上げた。

「ほら、気の利いた箱物」

「あー、あれ」

友達は苦笑いして頭を掻いた。

「超すべったけどね」

「そんなことないよ、あいつがダサイんだって。だって本にもおんなじこと書いてあったんだよ、ほら」

見せたのは自分の席からいそいそ持参した本だ。県庁の観光課を舞台にした小説である。その場面を開いて見せると、友達の目が探すようにページの上をさまよった。本は読み慣れていないらしい。

「……あー、ほんとだ。あたし、おとんの受け売りだったんだけど」

聞くと、友達の父上はそれこそ県庁の観光課に勤めているという。

「じゃあこれ読んでみない？ お父さんのお仕事とか身近に感じて面白いかも」

「おとんの仕事なんて別にどうでもいいけどさ……」

と意味つ友達は本をパラパラとめくった。それなりに目が文字を追おうとしている。

「ちよつと分厚くない？」

「大丈夫だよ、文章読みやすいから」

「そっかあ。それなら朝読とかにいいかなあ」

朝の読書運動、略して朝読は、B この小説流に言えば文科省が初

めて5 気の利いた制度を作ったということになるだろう。朝、一時間目が始まる前の十分間、好きな本を読むだけで何やら教師の心証が良くなる。活字中毒の彼女にしてみればやらすぶったくり丸儲けのような制度だ。

「6 貸してあげる」

えー、でも、と友達は少し気後れする様子を見せた。

「読んでる途中でしょ？」

「もう何度も読んでるの。それに他の本も持ってきてるし」

「じゃあ借りよかな……」

「ぜひぜひ！」

半ば強引に貸して、後はやいやいやい言わずに見守った。読書仲間を作る鉄則だ。本は一人で読むのも楽しいが、同じ本を好きな友達とあれこれ話すのも楽しい。小学生のときは『名探偵三日月キヨシ』仲間がいたが、家が離れていたので中学で学区が分かれてしまった。

友達は朝読の時間ごとに彼女の貸した本をめくっているようだった。最初はページの束が少しずつ、やがて毎朝の開く束の厚みが増えた。十分間の朝読で読み進むわけもない厚みで、家でもきつと読んでいる。

しめしめ、もう少し。

ある日、友達は学校に来るなり彼女のところへ駆け寄ってきた。

「ねえ、あの本、うちのおとんが家で言つてたことほぼほぼそのまま載つててね！」

「ああ、道の駅の？」

「それだけじゃなくて、おとんが仕事のことでもカッコつけて言うことほぼほぼ！ 名刺は名前を刺す道具だとかテーマパーク日本全国とか！」

どちらもその作品のキーワードとして出てくる。

「そんでおかしいなーと思つておとん問い詰めたら、仕事の研修でこの本使つてるんだつて！」

「えーっ、すごい！」

自分の好きな本が役所の研修で使われているなんて！ 自分のセンスがいいと保証されたような誇らしい気持ちになった。

「だからうちのおとんのカッコつけ、ほぼほぼこの本の受け売り！」
友達はそう言つて、ウケるとけらけら笑つた。

「おとんもこの本面白かつたんだつて」

おとん「も。も、ということとは？」

「めっちゃ面白かつた！ おとんも頑張つてんだなーつて思つたし」
やつた。薦めて面白かつたと返ってくるのは最高である。

「これ返すね。この作家さんの本、他にも持つてたら貸してくれる？」

8 最の最の高だ。

ショートカットで足の速い、小学校が一緒の割と仲のいい友達は、こうして彼女の読書仲間になった。

彼女は、b 寸暇を惜しんで本を読みたいあまりの帰宅部だったが、友達も意外や帰宅部、そのうえ帰り道も途中まで同じだったので、自然と一緒に帰るようになった。

「せつかく足が速いのに部活とかやんないの？」

実際、陸上の顧問でもある体育教師に授業でちよいちよいスカウトされている。まだ間に合う、今がチャンスという誘い文句は、まもなく夏休みだからだろう。夏休みの練習に参加すれば来年には短距離選手も夢じゃないとか何とか。

「いやー、ダメダメ。あたしあの鉄砲ダメなのよ」

「鉄砲つてあれ？ スターター？」

「そうそう。あのパアンつていうのが無理。練習はまだいいんだけど、試合だと緊張しまくつてヒイつてなる。小学校のときもビクウつてなつて出遅れるかフライングかどつちかであ」

「へえ、意外」

運動ができる人には勝負度胸も備わつていて思つていた。

「こう見えて、ウサギの心臓なのよ」

そう言つて友達はニツと笑つた。先日貸した本に出てきた表現だ。胸がくすぐつたくなるようで釣られて笑つてしまふ。

「分かる、あたしもあれ苦手。ビビるよね」

「練習いいタイム出るだけにみんな超ガツカリするじゃん？ もう人の期待を裏切る人生なんてイヤなのよ。足ちよつと速いだけだし」

「いやいや、足速いのは才能よ」

「そっちこそじゃん」

何言つてんのという顔で返されて頭がハテナで満ち満ちた。思い当たる才能の節がない。

「本読む天才じゃん。貸してもらつたの全部面白いし」

友達は彼女の薦める本を片っ端から読んでくれるうえ、ハマる打率は百発百中だった。一緒に語れる作家も大分増えた。

「何でこんな面白い本ばかり知つてるのつてびっくりするわ、毎度」

また胸がくすぐつたい。手放しの絶賛に、鼻が高くなりつつ、照れくさくて背中も少々むずむず。

「面白いつて思った本だけ薦めてるからさ〜」

「つまんないのもあるんだ？」

「そりや中にはあるよ。でもそれが面白いつて人もいると思う、あたしに面白くないだけで」

「あー、じゃあ、あたしはセンス合うんだね」

まるで 10 特大の勳章を突然差し出されたようだった。

そうは言つても足の速い世界の住人だ。運動が得意でない彼女からすれば、体育の時間に憂鬱にならなくて済むだけでリア充だ。コドモの世界において運動ができるということはパスポートをひとつ持っているに等しい。取り敢えず周りに一目置かれる。

そんな世界の住人とセンスが合うなんてことが自分の人生に起こるとは。

「そうだね、センス合うよね」

できるだけさりげなく向こうの耳に届いていますように。

「絶対合うって！」

断言の口調にまた勳章。C 嬉し恥ずか死ぬ。

「だつて好きになるキャラも大体一緒じゃん？ キバヤんとかさ〜」
キバヤんというのはそのとき貸していた本の登場人物だ。陸上部の高校生の青春物。棒高跳びをやっているヒロインが思いを寄せる短距離走のエースで、つつけんだったが要素所で優しいツンデレ枠。

「あんた、陸上部入つたらキバヤんみたいな人いたかもよ〜」

「いや〜、道具使う競技はちよつとね〜」

顔をしかめてナイナイと手を振る様子がおかしくて笑つてしまった。

「道具はちよつとナイけど、キバヤんみたいな人いたら絶対好きになるわ〜」

「好きになる自信があまりすぎる」

ひとしきり萌え語りで騒いだ後に、友達があつと声を上げた。
「待つて、やばくない!!」

「キバヤんのデレが？」

「そうじゃなくて！ 親友同士で男のタイプ一緒だったらやばくない？」

11 思わず言葉を失つた。——それはあたしとあんたのことか。

「やばいよね！ キバヤん取り合いになるよ！」

「……いやいや、キバヤんはあんたのものよ」

ヒロインの属性は天然だ。天然の無邪気発言の数々に刺されてキバヤんは落ちる展開である。

「あたしは親友のために身を引くわ」

あたしはこんなふうにおどけてしか言えやしないよ。

「ちよつと待つて、あんたそれ自分だけしれつといい女になつてない？」

「いやいや、親友のためですから」

「うわ、むつかつてく！ あたしだつて身イ引けますから！ あんたが取つときなさいよ！」

「いやいや、熨斗つけて（＝自ら進んで）差し上げますから」

最後はキバヤんの押し付け合いになつてしまった。

同じ本を通じて次から次へと萌えのウェーブを乗りこなす中学生活に突入した。

親友は心強い萌えの相棒だった。相棒なので親友のことは始終見ていた。

親友のことをチラチラ横目で窺っている男子が数人いるな、ということは親友を見ていたから気づいた。彼女と親友の楽しいしゃべり場を物欲しげな顔で通りすぎる男子にささやかな優越感を感じつつ。

仲良くなりたいたいだろうけどごめんね。あたしたちはあたしたちで喋るのが楽しい。

二学期半ばの席替えでしゃべり場の布陣（二人の配置）は最強になった。彼女と親友は席が前後になったのだ。親友が前で彼女が後ろ。休み時間のチャイムが鳴るや否や親友がくると後ろを振り返って対面だ。親友をちらちら窺っている男子はますます入り込む隙間がない。

そんな中、12 果敢な男子が一人いた。陸上部に入った男子だ。

「なあ、お前今からでも陸上部に入れよ〜」

そんなふうにならぬ声をかけてくる。再三の勧誘にも拘らず結局陸上部に入らなかつた親友を、顧問が随分惜しがっているという。話しかけるいい口実だつたらう。

「あたしメンタル弱いからさ〜。よろしく言つといて」

親友は毎度そんなふうにならぬ。あしらわれることも嬉しいのだろう、13 表情筋と感情が直結しているタイプだった。

彼女と親友はこっそりモドキと呼んでいた。陸上部で短距離なのでそこだけキバヤンと一緒に、イラストに描かれた髪型もちよつと似ている、だがヘラヘラ話しかけてくる中身は似ても似つかないのキバヤンモドキ。本人の名前のもじりでもある。

「もー、モドキいつまでもしつこいわ〜」

あんたのこと好きなんだよ、なんてつまらないことは言わない。脈はないけど頑張れ、くらいは思うが、二人にとってモドキはいないときは全く思ひ出さないその他大勢の存在だった。

彼女にとって最も重要な人物は親友だし、親友にとって最も重要な人物は彼女であつて、たまにならぬかけかきかけてくる男子などが割って入る隙はないのであつた。次から次へと押し寄せてくるウェブを乗りこなすのに忙しい。

14 そのとき、どの波に乗っていたかは、多分一生忘れない。

架空世界の戦記物のシリーズだった。敵にも味方にも様々なタイプの指揮官が出てきて智略を戦わせる血沸き肉躍る展開、そこに絡み合ってくる人間模様やちよつとした息抜きエピソードが実にいい萌えを育み、育まれた萌えは更なる燃えの燃料にもなるのであつた。それぞれの指揮官にファンがつくようなシリーズだったが、そのときもやっぱり彼女と親友の推しは同じだった。部下に厳しくも優しいツンデレ少尉。

「あたしらツンデレに弱すぎるでしょ」

「ツンデレに逆らえないこの呪われし血よ……」

ただし、ツンデレなら何でもいいわけではない。その少尉は良いツンデレだった。キバヤンを少し思い起こさせる。

「もしキバヤンがこの世界に転生したら……」

「逆に少尉が現代の高校生に転生したら……」

開けてはならない沼のフタをちよいちよい開けつつ、二人でモリモリその長期シリーズを読み進めていた。

彼女は本といえば両親が何でも買ひ与えてくれる家だったので、彼女が買ってもらつたものを順次親友に貸す流れだった。親友が読み終わるまでネタバレはなし。

「新しいエピソード（エピソード）出てくると前の巻に戻りたくなるよね〜」

「いつでも貸すよ」

「ん〜、でも自分の欲しい。盛り上がったときいつでも読みたいのよ。ちよつと親父ハメようかと思つてる」

例の観光課勤めの父親だ。仲良くなつたきかけの本では随分親子で盛り上がったという。

「お父さん異世界SF大丈夫？」

「いけると思う、深夜アニメとかけっこう好きだし。二巻までもう一回貸してくれる？」

「オツケ、二巻まで読んだら完全にハマるよね」

15 そんな悪巧みをした翌日、さっそく二巻までを学校に持っていた。

「思い立ったが吉日ってね」

机の上に二冊を出すと、親友はまるで神社で拜むように彼女に柏手を打った。

「それ、お前の？」

弾んだ声をかけてきたのはモドキである。

「面白いよな、それ」

モドキ、なかなかいい趣味じゃないか、と少しばかり見直した。

「あたしのだよ。面白いよね」

彼女がそう答えると、モドキは途端に興味を失った顔をした。表情筋と感情が直結、モドキはただありのままにモドキだった。

「なーんだ」

こぼれた^{くぼ}咳きも多分悪気はなかったのだろう。ただただモドキであるだけで。

別にモドキに何か特別な感情を持つていたわけではない。視界に入つてこない限りは思い出しもしないその他大勢の男子の一人である。

それなのに、何だろこの気持ちは。通り魔にぎっくり斬られたような——いや、こんな奴に斬られたなんて認めてたまるか。傷つけられたなんて認めてたまるか。こつちだってアウトオブ眼中である。

ただ、同じ本が好きだったことで沸いた気持ちにどうしようもなく冷たい水を差された。その事実は覆せない。

「うっせボケ！ 失せろ！」

吐き捨てたのは親友だった。

ドスの利いた低い声に彼女も驚いたが、モドキも分かりやすくシ

ョックを受けていた。表情筋と感情はやはり直結。

「二度とあたしらの世界に入つてくんない！」

モドキはどう取り繕ったらしいのか分からなかったのだろう、へどもどへラへラしながら立ち去った。

親友は忌まわしさに満ちあふれた声でクソがと呟いた。

「モドキなんてとんでもねえわ、モドキですらなかつたわ」

あーもう、とガリガリ頭を搔く。

「キバやんに焼き土下座で謝りたい。部活と髪型だけとはいえ、あんなヤツと重ねるなんて」

16 冷たい水を差された気持ちに熱い湯が差される。源泉一〇〇パー。

クソが、と親友はまた呟いた。口汚いのに不思議なほど清々しい。

「大体あんな奴にこの本の良さが分かるわけがない」

そうだね、とやつと相槌を打てた。

あたしたちの『面白い』とあいつの『面白い』が一緒であろうはずがない。

モドキはその日からピタリと親友に寄つてこなくなつた。あいつは性格が悪いクソ女だと陰で言いふらしているらしい。

「クソにクソつて言われたところだ」

親友は鼻で笑つた。

D あれから何年経ったやら。

(中略)

17 不運を幸せで上書きするのは意外と簡単だ、好きなもので押し流せばいい。

あのときも好きなもので押し流したな、と中学時代をふと思ひ出

す。

モドキが親友を敵視したことで、親友はその後少し面倒な思いをした。モドキを好きな陸上部の女がモドキに取り入ろうとして陰口に同調したのである。陸上部の全員がそんな奴だったわけではないが、陸上部を袖にしたことを良く思っていなかった体育教師が親友に冷たく当たるようになったのが不運だった。同調していなかった部員も表立っては何も言えなくなった。

女の敵は男だったり女だったりだし、男の敵も女だったり男だったりだろうし、そのときどきだ。属性を分類することあまり意味はない。結局はそいつがどんな奴かだ。18 靴底にへばりつくガムは落ちている場所を選ばない。

萌えのウェーブを楽しんでいるだけのことをキモいのオタクの叩かれもした。しかしやっぱりそのとき親友と彼女を救ったのも萌えだった。

部活という派閥で叩いてくるのなら、自分たちも何か部活に入ればいいのではないかと思ひ、彼女は親友を誘って文芸部に入った。学年主任の恐い国語教師が顧問を務めているという計算の上のことだったが、部は本好きばかりだったし、大勢で乗りこなす萌えは大勢であるというだけでビッグウェーブになるのだった。

年に二回コピーで出す部誌は、顧問が年配で疎いのをいいことに、部内で流行っている作品の二次創作祭りになったりしていた。完全なる黒歴史で、思い返すと冷や汗が出る。

顧問の威力もあるだろうが、好きに夢中になっているうちに進級してクラス替えもあり、親友へのくだらない攻撃はいつのまにかうやむやになった。

不運に見舞われたときは、好きをどれだけ持っているかが耐久力になる。そのことを中学生という人生の早い時期で学んだのは、今にして思えば幸運だったのだろう。だからといってモドキたちに感

謝するつもりはこれっぽっちもないが。

彼女も親友も好きを増やし続けて E もう社会人である。これからも好きの歴史は増えていくし、共有するだろう。他にも何人か共有できる仲間がいる。

二次創作祭りだった部誌は、卒業するときみんなで焼却炉で焼き捨てた。好きでも始末せねばならない歴史もあるのであった。

(有川ひろ『物語の種』幻冬舎より)

問1 ……a、dの語句の意味として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

a 「いささか」

ア かなり
イ ほんのすこし

ウ おそらく
エ だいたい

b 「寸暇を惜しんで」

ア なるべく時間の余裕をもって

イ 無理にでも暇を作って

ウ 暇つぶしをしないで

エ わずかな時間も無駄にしないで

c 「鼻が高くなり」

ア 誇らしくなり
イ ずうずうしくなり

ウ 気持ちが軽くなり
エ 恥ずかしくなり

d 「袖にした」

ア 思わせぶりにだました
イ 冷たい態度で扱った

ウ 途中であきらめた
エ 悩み続けていた

問2 ——1 「国が初めて作った気の利いた箱物です」とありますが、この意見を聞いたときの先生の反応として最も適当なもの

ア 素晴らしい答えに驚いている。

イ 意外な意見にあっけにとられている。

ウ 不真面目な意見に怒りを感じている。

エ 不可解な発言に激しく混乱している。

問3

——2 「彼女も口がひん曲がった」とありますが、このときの「彼女」の気持ちとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 「友達」の言った良い意見が簡単に却下されてしまったことに不満を感じている。

イ 社会科の教師がぼんくらだという事実打ちのめされ、泣きそうになっている。

ウ 「友達」を助けるために発言したいと思っているが、怒りで言葉が出ないでいる。

エ 「友達」が不服そうであることに共感し、自分は味方だと伝えようと意気込んでいる。

問4

——3 「彼女がそのとき読んでいた小説」とありますが、この後「彼女」は「友達」にこの小説を薦めました。そのときに強調した「友達」に合っていると思う理由を含まない文を、本文から二つぬき出しなさい。ただし、一つ目は二十文字以上二十五字以内、二つ目は十五字以内の一文でぬき出し、それぞれはじめの五字で答えること。

問5

——4 「つまんない男」とありますが、「彼女」は先生のどのような点が「つまんない」と感じていますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 生徒の自由な発想の意見を否定し、そういうことを言うのはまずいという雰囲気(ふんいき)をクラスに植え付けようとする点。

イ 生徒が自分より優(すぐ)れていることを認めず、自分の意見を押しつけようとする点。

ウ 生徒たちの個性を伸ば(の)そうとどんな意見でも受け入れると口では言いながらも、正反対のことをしている点。

エ 教師の意向に沿った意見しか取り上げず、型にはまった方向に授業を進めようとする点。

問6

——5 「気の利いた制度」とありますが、どのような点が「気の利いた制度」だと「彼女」は考えていますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 読書好きかどうかに関わらず、全ての生徒が平等に教師からの評価をもらえるという点。

イ 運動が苦手な「彼女」でも、得意なことをすることが教師の評価につながるという点。

ウ いつものようにただ本を読んでいるだけで、教師の印象が良くなるという点。

エ 宿題が終わっていないのに本を読んでも教師から怒(おこ)られず、勉強しなくてもいいと思える点。

問7

——6 「貸してあげる」とありますが、「彼女」が「友達」にこのような提案をしたのはなぜですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア お薦めしたい本ではあるが、その場で読むにはページ数が多すぎると思ったから。

イ この本なら、本が嫌(きら)いな「友達」にも朝読用の本として適切だと思ったから。

ウ 「彼女」の好きな本を読ませることで、新しい読書仲間を作れるのではないかと思ったから。

エ 「彼女」の本をパラパラと読んで「友達」が、本の続きをとても読みたそうな様子を見せたから。

問8

——7 「ウケるとけらけら笑った」とありますが、このときの「友達」の気持ちとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 父親が本の内容を覚えていることに驚くと同時に、興味をもつ分野が似ていることを喜んでいる。

イ 父親の見栄(みえ)に気付いて面白がっているのと同時に、努力や苦労にも気付いて見直している。

ウ 父親のカッコつけに気付いてあきれいている一方で、その気持ちに「彼女」に悟(と)られたくないと思っている。

エ 今までの父親の言動が本からの受け売りだったことを笑っている一方で、父親の情けなさを軽蔑(けいべつ)している。

問9 — 8 「最後の高だ」を説明した次の文について、空らんに当てはまる言葉を答えなさい。1と2は本文から指定の字数でぬき出して答えること。3は十字以内の自分の言葉で答えること。(ただし、1には同じ言葉が二回入ります。)

本を薦める人間にとって(1 二字)に嬉しいのは、相手からの(2 五字)という言葉だが、今回は更に、薦めた本の作者の(3 十字以内)という要望までもらい、(1 二字)をも超えた喜びを感じたということ。

問10 — 9 「ウサギの心臓」とありますが、「友達」はなぜこの表現を使ったのですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 「彼女」がこの本の内容を忘れているため、本に出てくる独特な表現を使って思い出させてあげようと思ったから。
イ 「彼女」がこの本をどれだけ読み込んでいるかどうかを、本に出てくる表現を使うことよって試そうとしたから。

ウ 「彼女」に借りた本が気に入ったことを伝えていなかったから、本に出てくる言葉を使うことで気持ちを表そうとしたから。
エ 「彼女」に借りた本をちゃんと読んでいることをアピールし、読者同士でしか通じない表現で会話を楽しもうとしたから。

問11 — 10 「特大の勳章」とありますが、このとき「彼女」は何を「特大の勳章」だと思いましたか。二十五字以上三十字以内で答えなさい。

問12 — 11 「思わず言葉を失った」とありますが、これは「彼女」のどのようなことに対するどのような気持ちを表していますか。二十五字以上三十字以内で答えなさい。

問13 — 12 「果敢な男子」とありますが、なぜ「果敢」と言えるのですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 「親友」に話しかけられない男子が多い中、陸上部に誘う言葉をきっかけにして「親友」と仲良くなるうとしていたから。
イ 「親友」に何度断られても、部を強くしたいという情熱を持って、とにかくあきらめずに陸上部に誘っていたから。

ウ 「親友」の運動の才能を見極め、練習をすれば優秀な選手になると信じて「親友」を陸上部に入れようとしていたから。
エ 「親友」は男子と話さないときめているのに、どんなに反応がなくてもめげずに声をかけ続けていたから。

問14 — 13 「表情筋と感情が直結しているタイプ」とはどういう意味ですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 感情を言葉だけでなく表情にも出してしまうという意味。
イ 自分の感情がそのまま表情に出してしまうという意味。
ウ 表情が変わるとつられて感情も変化してしまうという意味。
エ 自分の表情に対する相手の反応から感情がきまるという意味。

問15

——14 「そのとき、どの波に乗っていたかは、多分一生忘れない」とありますが、なぜ「彼女」は「一生忘れない」と思っているのですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア そのときに乗っていた「波」が、あの頃ころ押し寄せていた「波」

イ その後に出会った様々な作品を含めても、そのときに乗っていた「波」のキャラが特に印象深いものだったから。

ウ そのときに乗っていた「波」が、「彼女」と「親友」との絆きずなを確かにするできごとに関わったから。

エ そのときに乗っていた「波」のキャラが、大切な「親友」にちよっかいをかけた男子と重なっていたから。

問16

——15 「そんな悪巧みわるたく」とはどのような内容ですか。三十字以上四十字以内で答えなさい。

問17

——16 「冷たい水を差された気持ちに熱い湯が差される」について、次の問いに答えなさい。

①彼女に「冷たい水」を差したのはどのような言葉ですか。本文から四字でぬき出して答えなさい。

②この表現から「彼女」のどのような気持ちが分かりますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分と「親友」の二人だけの世界にモドキが入り込んできたことに怒っていたが、「親友」が自分の代わりに反論してくれたおかげでスカッとしている。

イ モドキから同じ本を好きだと言われて改めて恋心こいこころを自覚したのに、相手が一瞬いっしゅんで否定してきたためがっかりしたが、「親友」が自分の味方してくれたことに救われている。

ウ モドキが本の中身に興味を持ったのが嬉うれしかったのに、急に興味のなさそうな反応をしたのががっかりしたが、「親友」が本への情熱を熱く語ってくれたおかげで、励ほげまされている。

エ 同じ本が好きだということで親近感を持ったモドキに気持ちを傷つけられたが、「親友」が怒りをあらわにしてくれたことでなぐさめられている。

問18

——17 「不運を幸せで上書きするのは意外と簡単だ」とありますが、「親友」はどのような「不運」をどのような「幸せ」で上書きしましたか。解答らんに合うように、二十五字以上三十五字以内で答えなさい。

問19

——18「靴底くつぞこにへばりつくガムは落ちている場所を選ばない」とありますが、それはどういう意味ですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 本当の敵は必ず意外な場所にいる。

イ いつどこで嫌きらなことにいくわすか分からない。

ウ 自分たちの敵は男だけとはかぎらない。

エ 不幸せは性別による手加減をしてくれない。

問20

以下は、この物語を読んだ先生と中学生の会話です。誤った読み方をしている生徒を一人選び、記号で答えなさい。

先生 「この物語は、地の文（＝会話以外の部分）の表現に特徴とくちようがありましたね。気がついたことを教えてください」

ア 「地の文で語り手が主人公を名前ではなく~~~~A『彼女』と呼んでいることには、これが特定の誰かの物語ではなく、私たちの周りにもある話だと感じさせる効果があります」

イ 「~~~~B『この小説流に言えば』という表現には、この物語があくまで創作であることを強調する効果があり、読者にこの物語を疑いながら読むように注意うながを促していることが分かります」

ウ 「~~~~C『嬉し恥ずか死ぬ』のようなくだけた表現からは、語り手が登場人物全員を客観的に描びやうしや写するのではなく、主人公の視線を通したり心情に寄りそったりしながら、心の声を含んで描えがいているということが分かります」

エ 「~~~~D『あれから何年経たったやら』という表現からは、それまでの内容が全て「彼女」による回想だということが分かり、~~~~E『もう社会人である』という表現からは、大人になった時点から物語が語られていることが分かります」

問題は以上です。